【聴楽033】歴史学の視点

小泉吉永

はじめに（担当講義のシラバスより）

科目名	歴史学Ⅰ（歴史学概説）
授業の目的	歴史学の基本的視点を確認したうえで、往来物などの文献史料を読み解きながら、成熟した江戸時代の庶民社会や庶民文化を学びます。具体的には次の3点を目指します。 ①歴史的事象を、その時代に生きた人々の息づかいを感じながら学ぶ。 ②当時の実情から歴史を理解し、現代人として何を学ぶべきかという問題意識を持つ。 ③古典籍・古文書などの文献史料の初歩的な解読力・読解力を養う。
到達目標	①授業で扱った基本的な歴史用語について高校日本史教科書以上の説明ができる。 ②授業で扱ったテーマや内容について問題意識を持ち、主体的に取り組むことができる。 ③授業で扱った文献史料の概要を説明できる。
授業外学修内容・授業外学修時間数	各回テーマの関連事項について予習し、授業後に復習・整理することで、より多くの知見を得、課題や疑問点も明らかになります。往来物データベース（下記参照）や参考文献などを活用した発展的な学修を期待します。このような授業外学修を合計で60時間以上心懸けてください。
授業計画 ＊は扱う主要文献	【1回】 歴史学の視点（歴史学概説、日本史教科書と歴史科往来） 【2回】 寺子屋と往来物①（寺子屋規則と読み書き学習）＊各種手習本 【3回】 寺子屋と往来物②（往来物の成立と展開）＊「手習出精双六」、各種往来物 【4回】 都市と農村（元禄期の都鄙問題）＊「摂河往来」「山里国村記」 【5回】 町役人の実務（上州沼田の町役人文書）＊「町年寄助右衛門・日記控」 【6回】 村役人の実務（庄屋の役割と後継者育成）＊「庄屋日記（庄屋往来）」「親子茶呑咄」 【7回】 出版物と出版統制＊「大坂本屋仲間記録」「女大学」「続女大学」 【8回】 産業と物産（産業科往来）＊「商売往来」「塩浜実語教」「随所往来」「喜撰往来」 【9回】 旅と観光地（地理科往来）＊「道中往来」「上州草津温泉往来」 【10回】 災害と異変（飢饉・地震・経済混乱等）＊「満作往来」「地震後教」「御手本」 【11回】 武家と庶民の礼法（書札礼・食礼の歴史と通俗化）＊「諸礼大学」「女諸礼綾錦」 【12回】 婚礼（婚礼の変遷から仲人ビジネスまで）＊「婚礼往来」「嫁入談合柱」「婚姻男子訓」 ……以下、省略（全15回）……

歴史とは？

○辞書による「歴史」の説明

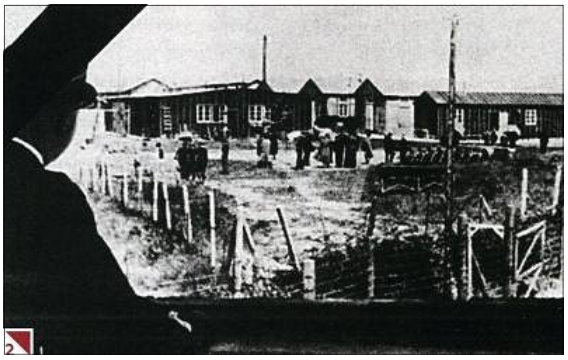
	広辞苑（第7版）	デジタル大辞泉	大辞林（第3版）	精選版 日本国語大辞典
1	人類社会の過去における変遷・興亡のありさま。また、その記録。	人間社会が経てきた変遷・発展の経過。また、その記録。	人間社会が時間の経過とともに移り変わってきた過程と、その中での出来事。また、それをある秩序・観点のもとにまとめた記録・文書。	過去の人間生活に起こった事象の変遷・発展の経過。また、その、ある観点から秩序づけられた記述。
2	物事の現在に至る来歴。	ある事物・物事の現在まで進展・変化してきた過程。	ある事物が今日まで経過してきた変化の跡。経歴。来歴。	ある事物の進展・変化してきた過程。
3		「歴史学」の略。	「歴史学」の略。	「れきしがく（歴史学）」の略。
4				学校における歴史教育を内容とする科目。

○「あなたの言葉を辞書に載せよう 2017」（小学館・大辞泉キャンペーン）で、「歴史」への投稿の優秀作品

- 「if」が無いことを踏まえた上で、「if」を想像すると楽しいもの。―― 猪鹿ソーセージさん
- 勝者の記憶。あるいは勝者に都合の良い「事実」になっている話。―― 櫻月さん
- 様々な人間の、生きざまと死にざま。―― 一二三茶さん
- 連綿と繋がって途切れない時間の堆積。―― 吉岡景子さん
- くり返されるもの。その大部分は失態。―― 水酸化ナトリウムさん

歴史学の視点の例

A＝『わかる・身につく歴史学の学び方』（大学の歴史教育を考える会編） ／ B＝『歴史学入門』（福井憲彦著）



○現代的関心から過去を見る（A4頁）。現在まで続く諸問題の歴史的展開を考える（A5頁）

○高校歴史学習と大学の歴史学の違い（A8-）
- 「正解が一つではない（一つとは限らない）」「歴史的人物の評価の揺れ」 → 真実はどこにあるのか（暗記から探求へ）
- 定説に対する仮説構築の面白さ、新たな発見の面白さ → 歴史的な問題意識を持つ大切さ（A9）

○歴史学研究の大原則は「史料批判に基づく事実立脚性」と「論理整合性」だが、歴史学は「総合の学問」であり、最終的には「人間とは何か」「自分とは何か」にたどり着く（A10）。

○歴史学研究のステップ（A10-）
①問題意識……あるテーマを追求する理由
②先行研究……過去の研究の網羅的な調査
③仮説（見通し）……テーマの見通し → ④史料収集／⑤歴史像構築
④史料収集（事実立脚性と論理整合性）……何が事実か、矛盾はないか
⑤歴史像の構築（仮説の提示）……以上から何が言えるか
⑥検証……従来の説は妥当か、新たな解釈、新たな視点、新たな事実はないか

○大学の歴史学への橋渡しのために――知の転換（A14）
- 知識の体系的整理から問題意識の養成への転換……テーマは自分で見つける（自発的な課題設定）
- 文系・理系の狭い枠組みの超越……現代の狭い枠組みからの脱却
- 読書のすすめ……多ジャンルの読書を。ネット情報は活用しても、原典へのアプローチが大切。
- 自分の足で立って歩く……現代人の「常識」ではなく、自分の目で見て当時の人々の視点から考える。

○歴史を学ぶ意義（A50-）
- 先人の生き方に学ぶ。諸問題の本質を知り、現代をよりよく生きる知恵が得られる。
- 他国の歴史を知れば、他国の理解も深まり、対話の可能性も広がる。

○歴史学における「正しさ」（A69-）
- 「史実認識」から「解釈」を行うのが歴史学の思考パターンであるが、「史実認識」にも「解釈」にも、常に主観が入り込む。
- 「書かれた歴史」にも筆者の主観が必ず含まれるから、歴史史料にも必ず誰かの主観が入っている。
- 科学的方法は「物事を検証していくプロセス」そのものであり、「より正しい」史実認識・解釈を求め続けるしかない。

○新しい知をつくる（A70）
- 大学で学ぶ歴史や歴史学は、確定したように見える知識を再検討し、新たな知の発見や確定に参加していくこと。
- 現代を生きるわれわれの関心や問題意識から、研究テーマを主体的に立てることが大切。
- そのテーマには独自性が必要であるため、先行研究など「研究史」を押さえる必要がある。

○歴史像は過去の実態ではない（B7-）
- 歴史は過去についての問い。歴史と現在は行ったり来たりの往還の関係。
- われわれは「歴史のごく一面しか正確に推察できない」という謙虚な自戒が必要。
- 一つの歴史像は、現代人が解釈した過去の一面についての像であり、歴史像の再解釈は常に起こり得る。
- 史料における「歴史的事実の認定」と、それに基づく「全体的な解釈」の二つの繰り返しにより、歴史像が生み出される。

○現在の自明性を問い直す（B9-）

・歴史学は、過去の人たちが生きた軌跡を対象とするが、それを究明する人の考え方や生き方と大きく関わっている。

・過去に現在の常識を持ち込むのは、時代錯誤になりかねないから避けるべきだが、先入観なしの白紙の状態で過去を理解することも困難。従って、自分の理解や判断が時代錯誤を犯していないか、絶えず自問する必要がある。

・過去の時代を生きた人々の思考、感性、行動様式などは現在とは大いに異なる可能性があると認識すべき。

・歴史を問うことは、自分自身と現在を問い直すこと。それは、われわれが生きる世界の歴史性を捉えようとするもの。

・現在の歴史性を明らかにすることは、換言すれば、現在の自明性（当たり前と思う状態）を問い直すこと。

■歴史史料・史料批判、一次史料・二次史料ほか

○歴史史料とは何か　＊国立国会図書館　https://www.ndl.go.jp/modern/guidance/whats01.html

歴史とは、過去の事象を現代人に分りやすく筋道を立てて叙述したものである。歴史がしばしば「物語」として受け止められるのは「分りやすい筋道」があるからである。実際、かつて歴史は文芸・宗教と重なっていたし、今日でも文芸との境界は必ずしも判然とはしていない。

さて、過去に存在した事象を把握し筋道を立てるのに役立つ材料を「**史料**」と呼ぶ。紙に書かれた文献史料がすぐに頭に浮かぶが、口頭伝承、金石文、絵画、録音、映像（写真、動画）など様々な種類がある。遺物・遺跡なども広い意味の史料である。

史料は一つ一つ、歴史研究を行う上での有効性・信頼度（信憑性）が異なり、これを見極める作業を「**史料批判**」と呼ぶ。文献史料を例にとると、その目安となるものは、その史料を「いつ」「どこで」「だれが」書いたか、の三要素であり「そのとき」「その場で」「その人が」の三要素を充たしたものを「一次史料」と呼び、そうでないものを「二次史料」と呼んでいる。

○一次史料・二次史料　＊Wikipedia　https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%B2%E6%96%99

一次史料とは、当事者がその時々に遺した手紙、文書、日記などを指す。記述対象について「そのとき」「その場で」「その人が」の三要素を充たした文献を「一次史料」と呼び、そうでないものを「二次史料」と呼んでいる。代表的な一次史料に日記、書翰、公文書がある。コインや新聞記事は通常、一次史料ではない。

二次史料とは、上記三要素を満たさない文献史料を指す。第三者が記した物や、後の記録が該当する。二次史料は、一般に一次史料より重要性が劣るが、必ずしも信頼性に乏しいとは限らない。例えば、太田牛一（ぎゅういち）の『信長公記（しんちょうこうき）』や小瀬甫庵（おぜほあん）の『信長記』はいずれも織田信長に関する二次史料であるが、前者が高い信頼性を有していると考えられるのに対し、後者は史料としての価値はほとんどないとされる。

一次史料の意義　（正確性の検証はともかく）一次史料は歴史的問題に新たな情報を提供するものである。歴史学者は自ら一次史料を確認するとともに、新たな（未発見の）一次史料を探すことに熱心である。なぜなら、既存の文献類のみを元に書き、史料を使わない研究は、オリジナルな研究とは認められがたいからである。

ただし、一次史料は必ずしも正確というわけではない。日記や手紙などは主観的で偏った記述も付き物であり、歴史知識の乏しい人間が偏向した一次史料の記述を直接読めば誤った情報を得る事になる。その為、一次史料の読解のためには、その史料にバイアスを与える種々の性格を把握しなければならない。また、ある文献を二次史料だからといった理由のみで価値が低いと捨て去るのでは重要な情報を見落とすことにもなりかねないので、注意が必要である。

○一次資料・二次資料　＊図書館情報学用語辞典（コトバンク）

資料をその機能から区分する際に、オリジナルな情報を生成する「**一次資料**」と、それを編集、加工した「**二次資料**」という区分が一般的になされている。しかし、オリジナルか否かの判断の基準は明確ではなく、むしろ二次資料の情報源となるもの、さらには二次資料ではないという相対的な意味でこの語は使われている。図書や雑誌論文といった刊行形態を主たる特徴とする資料区分とは異なる観点の区分である。雑誌論文には、オリジナルな成果を発表する原著論文も、二次資料とされるレビュー論文も含まれている。<u>歴史学で用いられる「一次史料」とはまったく異なる</u>。

※Wikipedia → （主に図書館の分類で）書籍・論文など文献そのものを一次資料、書誌や文献の索引類を二次資料ということもある。

新発見の史料で歴史は変わる

【事例1】 有名な「泰平の眠りをさます上喜撰たった四杯で夜も眠れず」は、江戸期撰作を疑問視する説が浮上し、多くの教科書から一掃されたが、その後、江戸期撰作を裏付ける史料の発見が相次いだ。

【教科書から消えた風刺狂歌「泰平の眠りを覚ます上喜撰」、黒船来航直後のものと裏付ける書簡発見】

（神奈川新聞 2010年7月6日）

ペリー艦隊の黒船が横須賀・浦賀沖に来航した嘉永6年（1853）6月当時の江戸幕府の混乱ぶりを風刺した狂歌「泰平の眠りを覚ます上喜撰　たった四はいで夜も寝られず」が、黒船来航直後に詠まれたことを示す書簡がこのほど、東京都内で見つかった。この狂歌は関連史料が明治時代までしか、さかのぼれなかったことから「明治人の作ではないか」との説が10年ほど前から出され、最近ではほとんどの教科書から消えていた。発見者は、新史料によって旧来の説が正しかったことが裏付けられたとしている。

発見したのは元専修大講師で横須賀開国史研究会特別研究員の斎藤純さん（62）。同研究会が編集し、横須賀市が発行する研究誌「開国史研究第10号」で経緯を報告している。

それによると、書簡は1853年6月30日付で日本橋の書店主山城屋佐兵衛が常陸土浦（茨城県）の国学者色川三中にあてたもの。異国船（黒船）の件で江戸が騒がしい状況を知らせ、追伸の形で「太平之ねむけをさます上喜撰（蒸気船と添え書き）　たった四はいて夜るもねられす」などの狂歌が記されていた。

斎藤さんは茨城県の豪農大久保真菅が収集したペリー艦隊来航記録を調べていた際、大久保の師である色川の黒船来航記録に関心を寄せた。今年2月初め、静嘉堂文庫（東京都世田谷区）が所蔵する色川の旧蔵書の中に、色川本人が山城屋の書簡を張り付けて保存していた「色川三中来翰集」があるのを見つけた。

通常引用される狂歌と比べ、「泰平」が「太平」に、「ねむり」が「ねむけ」となっているが、斎藤さんは「表記上の違いで、『ねむり』は書き写す過程で変わった可能性がある。基本的な意味は変わらない」と解説。「黒船来航当時の衝撃度がよく分かる狂歌で、ぜひ教科書でも復活してほしい」と話している。研究誌は800円。横須賀市役所や各行政センターなどで購入できる。

……

●泰平の眠りを覚ます上喜撰（Wikiquote：ウィキクォート）

泰平の眠りをさます上喜撰たつた四杯で夜も眠れず …… 狂歌

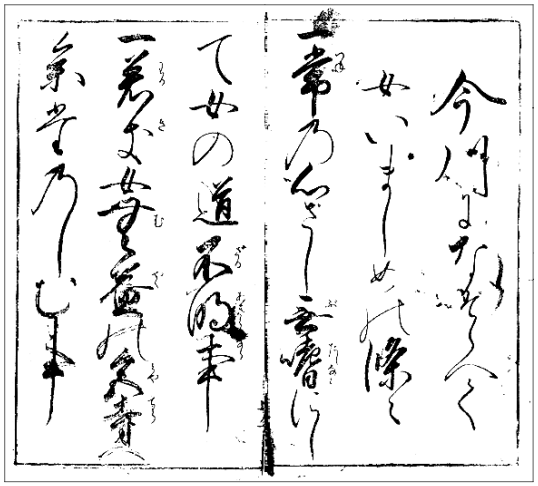
上喜撰は江戸期に流通した宇治茶の銘柄。上等な茶を四杯も飲むと夜眠れなくなることと、ペリーが黒船つまり蒸気船四杯で来航したのを掛けた狂歌。杯は船を数える助数詞のひとつ。

別形 ： アメリカガのませにきたる上喜撰たつた四杯で夜も寝ラレズ …… 吉田松陰『燕都流言録*1』に記録

＊燕都流言録＝「松陰直筆の「流言録」発見／山口・萩市の民家で」（四国新聞 2002/07/16 12:21）

幕末の志士、吉田松陰（1830-59）が江戸滞在中に書いたとみられる「燕都流言録」が16日までに、山口県萩市の民家で見つかった。鑑定した霊山歴史館（京都市）の木村幸比古学芸課長は「筆跡などから間違いなく直筆。全集にも無い貴重な資料だ」と評価している。流言録は、浦賀に来航した黒船を見ようと江戸を訪れた松陰が、1853年の夏ごろ書いたとみられる。当時江戸ではやっていた狂歌や見聞きした情報を記して、故郷の身内や同志らに送ったらしい。

【事例2】 一史料の発見で前提が変わる。一史料で結論づけるのは早計。



小泉編『往来物解題辞典』（2001年3月刊）では、女子用往来で最も出版点数が多い『女今川』は、概ね次のように位置づけられていた。

『女今川』は、貞享4年板系統と元禄13年板系統の2種に大別され、江戸中期～明治期までに両系統で250種以上の板種と20種近くの異本を生み、最も普及した女子用往来。両系統とも同趣旨の教訓を全23カ条と後文から成る壁書形式だが、これは『今川状』のスタイルを踏襲したもの。

①女今川（貞享4年板系統）

窪田つな書。貞享4年（1687）刊。［京都か］福森三郎兵衛板。2巻2冊。第1条が「一、常の心ざし無嗜にして女の道不明事」で始まり、以下、女性にあって

*1 『燕都流言録』は、嘉永6年（1853）頃作で、一般に「えんとりゅうげんろく」のルビを振るが、江戸時代の往来物『江戸往来』を『燕都往来』と記した例があるので、「えどりゅうげんろく」が本来の読み方であろう。

はならない禁止項目を列挙し、家庭における女性の心得全般を諭す。各箇条は、日常諸般の心得を、親や舅、姑、夫、その他家内の構成員（下僕等）、親類、友人、他人、特に僧侶や夫以外の男性との関係の中で説いたものが中心である。

②女今川［新女今川］（元禄13年板系統）

沢田吉作・序。菱川師宣画か。元禄13年（1700）刊。［江戸］板木屋新助ほか板。2巻2冊。貞享4年本の改編版で、沢田吉の自序に「此比有人の書し『女今川』をみるに…」とあり、「然るに、今また改かふる事は、全我言をよしとするにあらず。自かたましき所をひそかにしるして…」と述べることから執筆動機が知られるが、このことは貞享板の首題『今川になぞらへて女いましめの条々』をあえて『自を戒む制詞の条々』と改めた点にも象徴されている。

各条々は貞享板とほぼ同傾向だが、後文については改編の跡が著しく、具体的には「心かだまし」と「心すなほ」の強調が目立つ。本書を自戒の書として書いた吉の理想は、「かだまし」き点のない、「すなほ」な心延えの女性だったのであろう。また、第5条では「主・親の深き恩」を「父母の深き恩」と言い換え、「忠孝」の代わりに「孝の道」とした点、さらに後文で、天地の道や五常を説いた抽象的な表現や、下僕や他人に対する心得などを割愛する一方、孝・貞の見地から己の心の善悪を内省することを説いた点に特色がある。

……

その後、安田千恵美氏（当時、立教大学大学院文学研究科博士課程）が、貞享4年板系統の『女今川』とほぼ同内容で、それい先立つ金沢市立玉川図書館蔵の写本『女今川』（本文末尾に「貞享二年正月日」と記す）を見出し、**「「女今川」成立考:女子用往来の写本と刊本」**（立教大学史学会『史苑』73巻1号、123-138頁、2013年1月）を発表した。その論考によると、貞享2年の記載がある「金沢図本」の発見から、次のように指摘した。

「従来の研究史では、刊本のみを扱って論じていたため、「女今川」の成立に関する考察の視点が欠けていた。しかし、貞享二年の金沢図本により、「女今川」が近世において書物として商品化される過程への考察が可能となった」

「試みに本稿の成果を踏まえて新たな類型を考えれば、①初期写本の段階、②初期刊本の段階、③前期刊本の段階、④後期刊本の段階」とすべきであろう」

……

だが、「貞享二年正月日」の刊記を持つ伊勢屋伊兵衛板が見つかった。

いずれも小泉蔵本で次の2冊である。

①改装・原題簽「女今川　全」本　＊2013年12月7日、神保町古書即売会購入

②改装・書き題簽「女今川　全」本　＊2019年6月26日、ヤフオク購入

板元の伊勢屋は京都の書肆と思われるが未詳。筆者「幽照庵力」も不明。

この貞享2年板は、金沢図本と仮名遣いや漢字表記などの小異はあるが、基本的に同文である。従って、金沢図本は貞享2年板の写しである可能性があり、少なくとも版本に先立つ写本と断定することはできない。

よって、先に引用した写本の書物から木版本への商品化の過程に関する仮説も、『女今川』の新たな類型化とその発展段階に関する仮説も、確固たる根拠を失ってしまった。

【事例3】 昭和3年作と言われてきた「親父の小言」。実は江戸末期（嘉永5年）には存在していたことが判明。

○江戸版「親父の小言」発見とメディア報道

【2013年】

・2月末、ヤフオクで落札。3月初旬、落手。
・6月中旬、江戸版の翻字完成。
・7月6日、成田山仏教図書館調査。
・7月中旬、『武道』連載記事（9月号）で全文紹介。
・7月下旬、大聖寺に連絡。
・8月下旬、小冊子『江戸版 親父の小言』刊行。
・8月30日、朝日新聞「親父の小言 起源は江戸」＊関西版「ガミガミ親父 江戸にいた」。
・9月24日、『FLASH』1253号「あぁ「親父の小言」が身にしみる」。

【2014年】

・1月24日、日経新聞「江戸期の教材 庶民の鏡」＊「小言」発見も紹介。
・3月17日、NHK視点・論点「江戸時代にあった“親父の小言”」に出演。
・4月14-17日、NHKラジオ深夜便「江戸庶民の人生訓「親父の小言」に学ぶ」に出演。
・7月中旬、新書『痛快！気くばり指南「親父の小言」』（青春出版社）刊行。
・7月9日、日刊ゲンダイ「江戸版「親父の小言」には生活の知恵が満載」
・10月11日～12月14日、群馬県太田市立縁切寺満徳寺資料館特別展「『親父の小言』と親心」の企画全般、図録作成および講演。

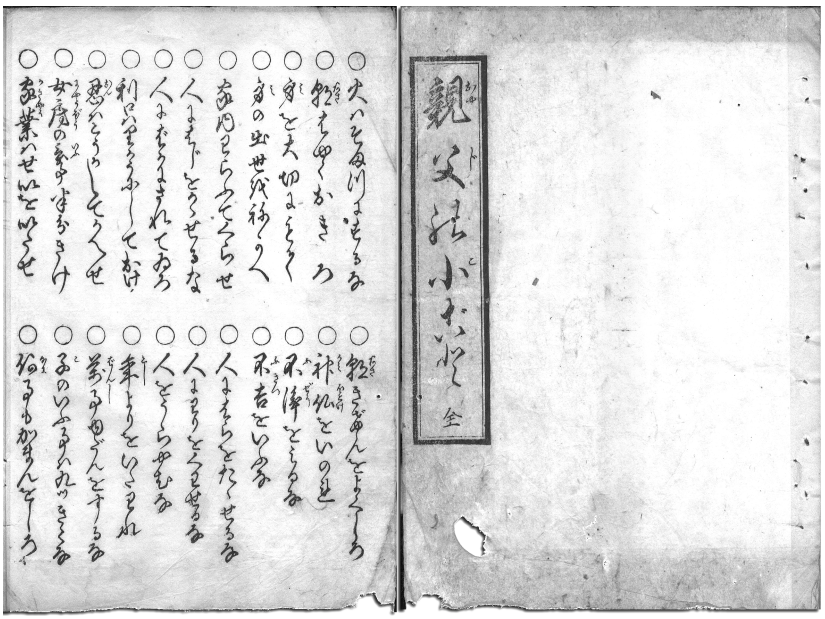
○「親父の小言」は江戸生まれ

【昭和3年・大聖寺版「親父の小言」 45カ条】

・現在流布する「小言」は大聖寺版に由来。
・先々代住職・暁仙和尚が昭和3年に父の言葉を思い出して書き綴ったもの。
・昭和30年代半ばに町内の商店が土産物として売り出し、全国に普及。

【嘉永5年・江戸板「親父の小ごと」 81カ条】

・嘉永5年（1852）に江戸神田で出版。



2013/8/30 朝日夕刊　第3種郵便物認可

親父の小言 起源は江戸

「火は粗末にするな」「朝きげんよくしろ」といった、居酒屋などで見かける人生訓「親父の小言」。知られているのは、実は福島県浪江町の寺から戦後に広まったものだが、江戸時代にはすでに本にまとめられていたことが分かった。しかも、81カ条もある。

江戸時代にまとめられた「親父の小ごと」。「人に腹を立たせるな」「人に恥をかかせるな」などとある＝小泉吉永さん提供

人生訓 45カ条より古い81カ条

法政大文学部講師の小泉吉永さん（54）が今春、古書店のオークションで6万円の仮とじ和本を見つけ、購入。和紙の状態や裏表紙に「嘉永五年 九月吉日」と刷られていることから、江戸時代末期の1852年のものと確認できる。

表紙には「親父の小ごと全」とある。作者は不明だが、「施主 神田住」の文字から、小泉さんは、東京・神田の篤志家が出資して作ったものとみている。当時は篤志家が社会貢献として書物を無料で配ることがあったという。

内容は、これまで知られていた45カ条を含む81カ条。「子どもの頭を打つな」「人に恥をかかせるな」といったものもあった。小泉さんは「江戸の庶民が大切にしてきた処世訓を簡潔に述べた金言集と言える」。

「小言」は、浪江町にある大聖寺から広まったと言われる。昭和初期の1928年、当時の住職・青田暁仙さんが書家に45カ条を書いてもらい、庫裏に掲げた。その内容を檀家の日用雑貨店が額装して売り出し、戦後に知られるようになったとされる。

現住職の敦郎さん（53）は暁仙さんの孫。「父が原本を探したけれど分からなかった。江戸時代にあったなんて」と驚く。原発事故の影響で福島市に避難しているが、庫裏に掲げた額は「大切なものだから」と一時帰宅時に持ち出した。

江戸時代の教育史に詳しい江森一郎・金沢大名誉教授は「江戸時代版には江戸時代的な教訓が多く、当時の社会をうかがわせる貴重な史料。45カ条のものと比較すると、時代の変化を考察できるのでは」と話す。

小泉さんは、23日に大空社から小冊子「江戸版 親父の小言」（税別500円）を出版。昭和版と比較した解説も載せている。

（山本奈朱香）

■親父の小言（抜粋）

45カ条にある内容	81カ条にあった内容
・人に馬鹿にされていよ ・年寄りをいたわれ ・大酒は呑（の）むな ・貧乏を苦にするな ・小便は小便所へしろ ・家内は笑うて暮らせ	・朝早く起きろ ・人を羨（うらや）むな ・子供の頭を打つな ・喧嘩（けんか）をするな ・若い内は寝ずに稼げ ・年寄ったら楽をしろ